

[6]九州大学韓国研究センターNews Letter

<https://hdl.handle.net/2324/2004832>

出版情報：九州大学韓国研究センターNews Letter. 6, pp.1-, 2006-03-15. Research Center for Korean Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



ews 뉴스레터 2006 Vol.6 뉴스레터 Letter

九州大学韓国研究センター
Research Center for Korean Studies

C O N T E N T S

「4+2+4」アクションプランと歩調を合わせて.....	2
世界韓国研究コンソーシアム	4
第1回韓国学ワークショップ	5
福岡県民シンポジウム	6
高句麗シンポジウム	7
植民地シンポジウム	8
日韓共同研究の展望－韓国の日本研究と日本の韓国研究－	9
日韓海峡圏学生サミット	10
客員教授紹介	11
研究紹介	12
世界の韓国研究	14
九州大学における韓国学教育	15
センター研究活動一覧、Information	16

「4+2+4 アクションプラン」と歩調を合わせて

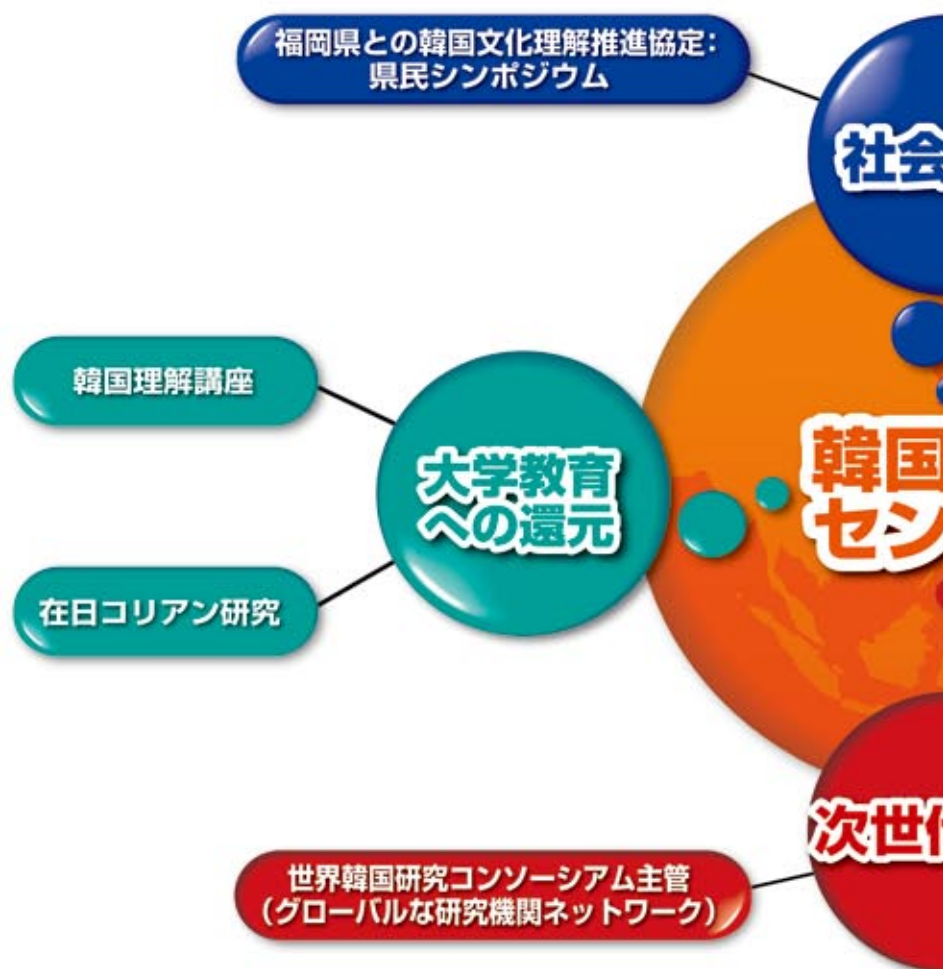


九州大学韓国研究センター長
稲葉 継雄

九州大学は「4+2+4アクションプラン」を提唱していますが、我が韓国研究センターは、1999年12月に創立され、2002年4月に文部科学省令に基づく学内共同教育研究施設として誕生して以来、「4+2+4」の最初の「4」である「教育」、「研究」、「社会貢献」、「国際貢献」に関して、次のように展開してきました。

まず創立以来進めてきた研究の主軸の一つである「植民地研究」に関しては、国際シンポジウム主催数や公表した研究論文の数だけでも、世界における植民地研究拠点として認知されつつありますので、それを着実に展開させたいと念じます。

次に、教育面ですが、世界における韓国学次世代研究者の育成に一層尽力するつもりです。グローバルな研究機関ネットワークである世界韓国研究コンソーシアムを主管していますので、「世界から九州大学へ、九州大学から世界へ」と研究者が往き来し、世代を超えて、世界レベルで韓国学が活性化されるように努力します。また九州大学全学教育科目・少



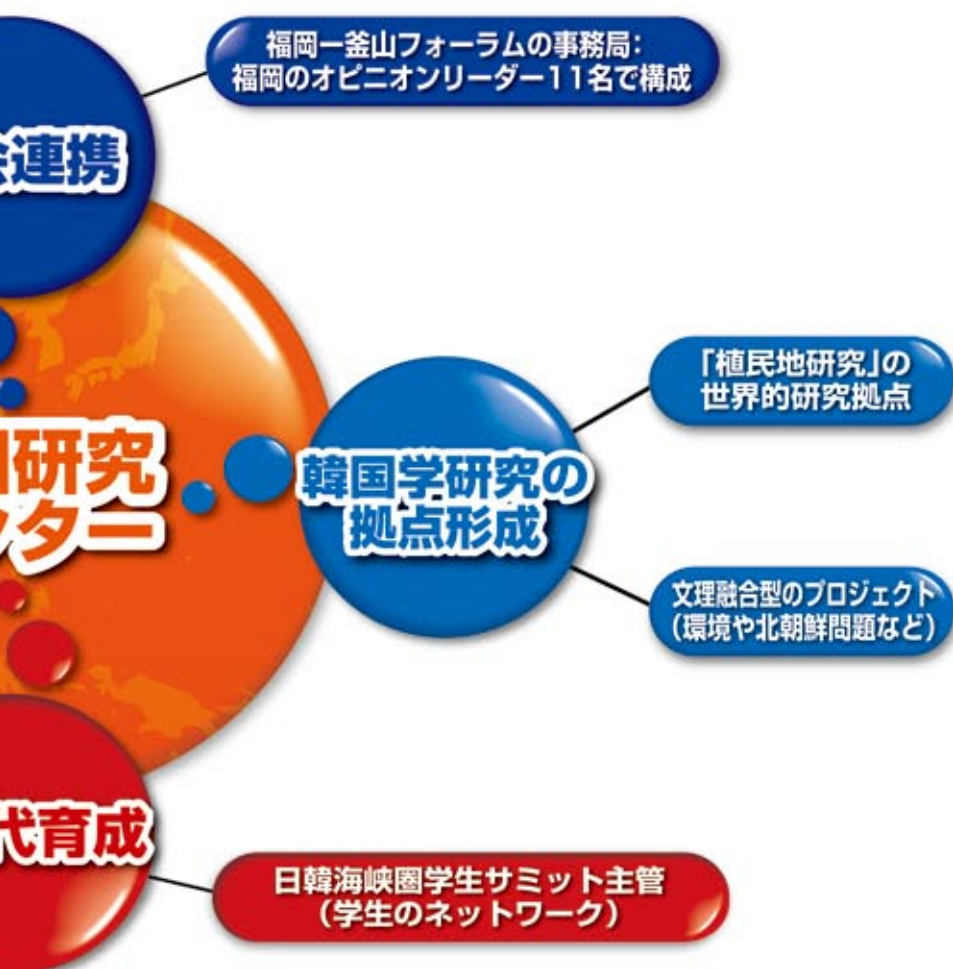
人数セミナーなどに参与して、今後共に韓国研究センターが蓄積してきた優れた研究成果を積極的に教育現場に還元していきます。

社会貢献として、地域社会との連携・協力態勢を一層強化します。梶山千里九州大学総長をはじめとする運輸・銀行・新聞・医療など地域のオピニオン・リーダー11名が参加する「福岡-釜山フォーラム」の福岡側事務局の重責を担いながら、日韓海峡圏の「新しい富の創出」や次世代養成などの共通課題などに取り組んでいきます。また福岡県とは国際文化理解促進協定を締結し、県民セミナーや県民シンポジウムを通じて、福岡県民の国際交流の促進に応分の寄与をしていきます。

国際貢献として、本研究センターが主管する世界韓国研究コンソーシアムを活用して、国策でもある「北朝鮮問題」や「東アジアの環境問題」などの文理融合型の新たなプロジェクトを立ち上げ、本学の国際貢献を一層進展させます。

本センターは省令化から4年が経過して「第2ステージ」を迎え、決意を新たにしております。「4+2+4アクションプラン」の第2番目の「2」である「実績に基づく新科学領域への展開」と「歴史的・地理的な必然が導きアジア指向」のうち、後者の「歴史的・地理的な必然が導きアジア指向」は今後共に我が韓国研究センターの責務として、それを飛躍的に展開させていきます。また「実績に基づく新科学領域への展開」にしても、文理融合型の新たなプロジェクトを実施していく中で、創造的な研究分野の開拓に努力していきます。

なにとぞ今後ともに、倍旧のご支援・ご鞭撻のほどをお願い申し上げます。



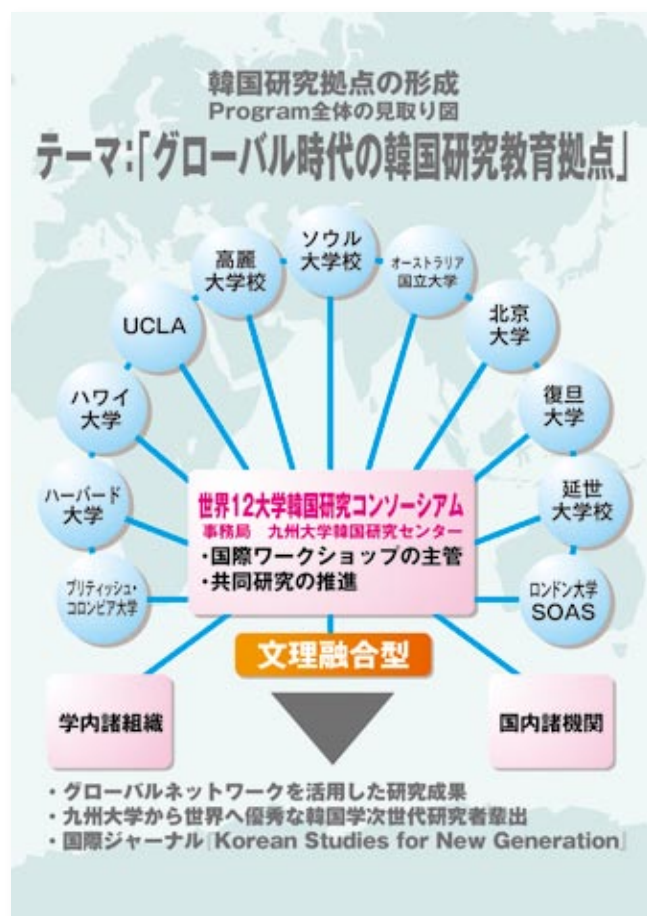
世界韓国研究コンソーシアムへと拡大・発展 グローバルなネットワークの結節点としての九州大学

韓国研究センターは2006年2月11日、環太平洋韓国研究センターコンソーシアム・第2回センター長会議を開催した。環太平洋韓国研究コンソーシアムは2005年2月に8つの大学によって発足したが、今回さらに、ハーバード大・UBC・延世大・ロンドン大SOASなど4つの大学が加わり、12の大学から構成される世界韓国研究コンソーシアムへと発展的に再編された。

世界に類を見ないグローバルなネットワークの結節点

世界12大学はどれも各国のトップ校。米国のハーバード大・UCLA・ハワイ大、カナダのUBC、オーストラリアのANU、英国のロンドン大SOAS、韓国のソウル大・高麗大・延世大、中国の北京大・復旦大を網羅した、日本学にも中国学にもない地域研究で初めてのグローバルなネットワークの結節点の役割を九州大学が担う。

世界に類を見ないグローバルなネットワークの形成と九州大学の結節点としての役割
韓国学の次世代研究者の育成を目的とする国際ワークショップの開催、横・縦的なネットワークの形成。
韓国研究の促進と活性化を推進する、新たな韓国研究を創出する
国家を越えた環太平洋地域の韓国研究センターのコンソーシアム構築と共同研究を展開
本コンソーシアムを活用して、韓国研究を活性化し、優秀な次世代韓国学研究者を輩出する



グローバル時代の韓国研究教育拠点 世界から九州大学へ、九州大学から世界へ

国際ワークショップ

コンソーシアム加盟校から大学院生を招聘し、世界の韓国学の碩学の下、集中的にワークショップを行う。これにより、韓国学の次世代研究者を育成するとともに、グローバルなネットワークを形成する。九州大の学生にはこのネットワークをフルに活用した研究指導を受ける道が開かれる。

国際ジャーナル

世界の著名な韓国学研究者による査読制を導入した国際ジャーナルを刊行し、質の高い次世代韓国研究者を育成する。九州大は韓国研究の発信地として、日本のみならず世界における韓国学の研究拠点となる。

共同研究

韓国学のパラダイム・チェンジが求められる今日、研究体制もグローバル化する必要がある。多様な分野の専門家がグローバルに結集することで、韓国研究をリードする。

第1回韓国学ワークショップ

世界11大学韓国研究国際ワークショップ
(第1回)

世界11大学の次世代韓国研究者22名、一流の韓国研究者10名、福岡に集まる。

九州大学で「韓国のナショナリズム」を考える国際ワークショップを開催。新時代に向かって、世界の若者と共に近未来の日韓関係の手がかりを探る。

テーマ:「**韓国のナショナリズム**」

期 間:2005年6月26日(日)～7月5日(火)

会 場:九州大学職員会館(箱崎キャンパス)

参加者:世界11大学から各2名の大学院生、
総22名の大学院生

主 催:環太平洋韓国研究コンソーシアム

主 管:九州大学韓国研究センター

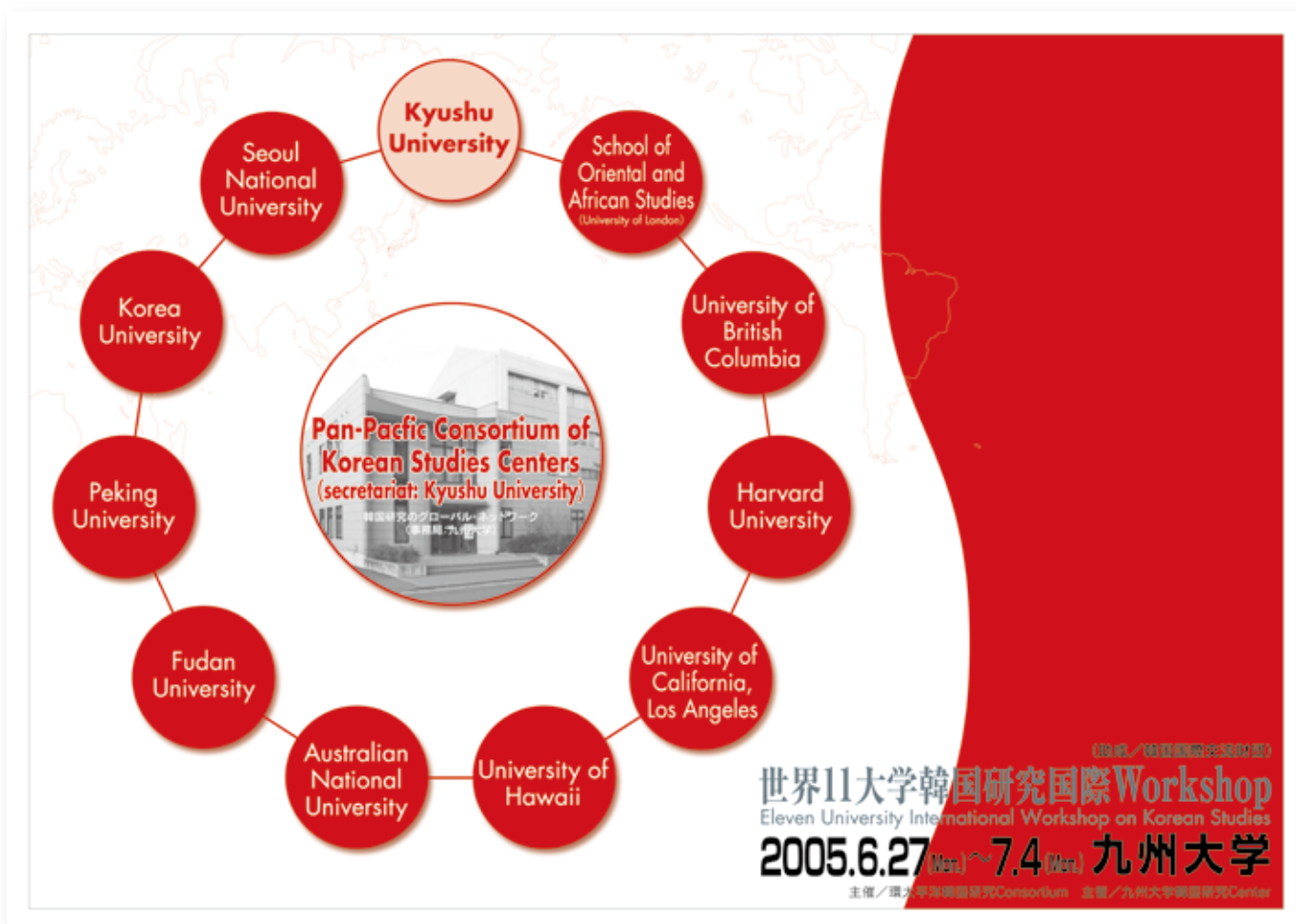
助 成:韓国国際交流財団

「韓国のナショナリズム」というテーマで、日韓という二国の間だけでなく、より広い世界的視野で若手研究者がより掘り下げて、根本的なところから検討・討議することに特別な意義をもつ。

世界で学んでいる若手韓国学研究者のネットワークの形成。世界に通用する次世代韓国研究者の育成。

縦・横的なネットワークの形成、国際ジャーナルの刊行への期待。

環太平洋韓国研究コンソーシアムを構成する8大学と、ハーバード大学・プリティッシュコロンビア大学・ロンドン大学SOASの3大学の11大学の大学からそれぞれ2名、総22名の大学院生が参加し、「韓国のナショナリズム」をテーマに第1回韓国学国際ワークショップを開催した。講師として、John Duncan先生(UCLA)・朴泰均(ソウル大学校)・崔徳寿(高麗大学校)など、7大学から10名の碩学が担当した。



福岡県民シンポジウム

茶道で学ぶ日韓 裏千家大宗匠 千玄室先生が語る『和の心』

日時:2005年11月21日(月)

会場:アクロス福岡シンフォニーホール

主催:九州大学韓国研究センター
福岡県国際交流センター

助成:韓国国際交流財団

<基調講演>

千玄室 裏千家大宗匠(文化勲章受章者、日本・国連親善大使・日韓文化交流会議委員)

<総合討論>

①任東権(韓国中央大学校名誉教授、福岡アジア文化大賞2005年度受賞者)

②熊倉功夫(国立民族学博物館名誉教授・林原美術館長)

私たちは、日常生活の中で、人と人の親しき交際を結びたいとき、「お茶を飲もうか」とか、「ご飯を食べようか」とか、あるいは「酒を飲もうか」と呼びかけます。その理由は、お茶や料理・酒を通して、接待する側(亭主)と客の間に人間的な温もりを通わせたいからです。

さて日本に「茶の湯」があり、韓国に「タド(茶道)」があります。「茶の湯」や「タド」が伝統を保持してきたのは、一椀のお茶を飲む行為に、どうすれば見知らぬ人間同士が瞬時にして親交を結べるかという文化装置が組み込んであったからだと考えて良いでしょう。

本シンポジウムでは、2005年が日韓友情年であることに鑑みて、千玄室大宗匠先生をはじめとする日韓の「お茶の湯」や「タド」の専門家が一同に会します。

まず千玄室先生に基調講演を通して、互いの伝統文化を語り、互いの「心の交わり」のプロセスを語っていただきます。そして任東権(韓国中央大学校名誉教授、福岡アジア文化大賞2005受賞者)と熊倉功夫先生(国立民族学博物館名誉教授・林原美術館長)が参加する総合討論では、互いの「和」の心を語り合いながら、日韓文化交流の促進と「21世紀を共に歩むパートナー」としての日韓関係の礎を構築することに寄与したいと考えています。

茶道で学ぶ日韓 裏千家 大宗匠

福岡という地域性を十分に生かした日韓文化交流の祭典であった。日韓の日常生活に欠かせない一杯の「お茶」を飲みながら、「21世紀を共に歩むパートナー」としての日韓関係の礎を構築していく貴重な日韓友情の場として大活躍した。今回、足を運んでいただいた方々から、ぜひこれからも色々なテーマで日韓文化交流を進めてほしいとの声が高かった。

2005年度
県民シンポジウム



2005.11.21(月) 13:30~16:00
(2時間30分)

アクロス福岡 シンフォニーホール

<http://www.acros.or.jp/> 入場無料

基調講演



千玄室

総合討論



金東権 熊倉功夫



お申し込み方法 11月17日(水)必着で、往復の切手にてお申し込み下さい。
*当日は値引き券の提示をお願いします。
*当日は値引き券の提示をお願いします。
*当日は値引き券の提示をお願いします。



九州国立博物館開館記念・朝日新聞西部本社70周年記念

高句麗シンポジウム
日本と高句麗：人とサラムの交流

日 時：2005年11月5日(土)

会 場：九州国立博物館

主 催：朝日新聞西部本社・韓国国際交流財団・
九州国立博物館・九州大学韓国研究センター・
高句麗研究財団

《プログラム》

【挨拶】午後1時～1時10分

三輪嘉六(九州国立博物館長)

金貞培(高句麗研究財団理事長)

増田隆(朝日新聞西部本社編集局長)

【1】公開講演 1時15分～1時55分

①武田幸男(東京大学名誉教授)「広開土王碑本との対話」

②金貞培(高句麗研究財団理事長)「高句麗とはどのような歴史か」

【2】研究報告 2時～4時10分

第1部「高句麗史をどのように理解するか」

①濱田耕策(九州大学教授)

「高句麗史上の父子2代ー広開土王と長寿王」

②盧泰敦(ソウル大学校教授)

「5世紀金石文にみられる高句麗人の天下観」

第2部「高句麗の文化をどう理解するか」

①崔光植(高麗大学校教授)「高句麗の神話と祭祀」

②東潮(徳島大学教授)「高句麗古墳壁画の世界」

第3部「高句麗史と古代韓国と日本」

①林起煥(高句麗研究財団研究企画室長)「高句麗と古代日本の文化交流」

②鈴木靖民(国学院大学教授)「高句麗と日本古代の国家形成」

【3】シンポジウム 4時15分～5時

司会：西谷正(伊都国歴史博物館館長)

武田幸男(東京大学名誉教授)

金貞培(高句麗研究財団理事長)

濱田耕策(九州大学教授)

盧泰敦(ソウル大学校教授)

崔光植(高麗大学校教授)

東潮(徳島大学教授)

林起煥(高句麗研究財団研究企画室長)

鈴木靖民(国学院大学教授)

松原孝俊(九州大学教授)

【4】開会の挨拶

石川捷治(九州大学韓国研究センター長)



高句麗シンポジウム
日本と高句麗：人とサラムの交流

九州国立博物館開館記念・朝日新聞西部本社70周年記念
共催：朝日新聞西部本社・韓国国際交流財団・九州国立博物館・九州大学韓国研究センター・高句麗研究財団

2005年11月5日(土)
時 間／午後1時～5時
会 場／九州国立博物館

【挨拶】午後1時～1時10分
三輪 嘉六(九州国立博物館長) 金貞培(高句麗研究財団理事長) 増田 隆(朝日新聞西部本社編集局長)

【1】公開講演 1時15分～1時55分
①武田 幸男(東京大学名誉教授)「広開土王碑本との対話」
②金貞培(高句麗研究財団理事長)「高句麗とはどのような歴史か」

【2】研究報告 2時～4時10分
第1部「高句麗史をどのように理解するか」 2時～2時40分
①濱田 耕策(九州大学教授)「高句麗史上の父子2代ー広開土王と長寿王」
②盧泰敦(ソウル大学校教授)「5世紀金石文にみられる高句麗人の天下観」
(休憩10分)
第2部「高句麗の文化をどう理解するか」 2時50分～3時30分
①崔光植(高麗大学校教授)「高句麗の神話と祭祀」
②東潮(徳島大学校教授)「高句麗古墳壁画の世界」
第3部「高句麗史と古代韓国と日本」 3時30分～4時10分
①林起煥(高句麗研究財団研究企画室長)「高句麗と古代日本の文化交流」
②鈴木靖民(国学院大学校教授)「高句麗と日本古代の国家形成」

【3】シンポジウム 司会：西谷 正(伊都国歴史博物館館長) 4時15分～5時
武田 幸男(東京大学名誉教授) 金貞培(高句麗研究財団理事長)
濱田 耕策(九州大学教授) 盧泰敦(ソウル大学校教授)
崔光植(高麗大学校教授) 東潮(徳島大学校教授)
林起煥(高句麗研究財団研究企画室長) 鈴木靖民(国学院大学校教授)
松原 孝俊(九州大学教授)

【4】開会の挨拶 石川 捷治(九州大学韓国研究センター長)

※次世代高句麗研究者ワークショップ
11月4日(金) 午後1時～5時 会場／九州大学国際カール

お申し込み方法
・10月25日(日)必着で、在席ハガキにてお申し込み下さい。
・在席ハガキ両方に住所、氏名、郵便番号を、または在席ハガキには「高句麗シンポジウム参加希望」とご記入下さい。
・当日は復信用ハガキを必ずご持参下さい。

●お問い合わせ先 九州大学韓国研究センター 〒812-8581 福岡市東区箱崎6丁目10番1号
TEL 092-642-4358 FAX 092-642-4359 E-mail: rcks.uok@mbbox.nc.kyushu-u.ac.jp

入場無料



日本と高句麗：人とサラムの交流

今回のシンポジウムを通して古代日本と朝鮮半島の交流や、韓国の歴史が身近なものになった。また、アジアの玄関口である福岡で日韓両国の研究者が最近の研究成果を報告し、古代の東アジア世界に対する理解と関心を高められたことは評価できる。さらに、次世代日韓高句麗研究者のネットワークや育成の結節点としての役割を果たした。

植民地シンポジウム

植民地研究の展望

日 時:2005年12月18日(日)

会 場:九州大学国際ホール

主 催:九州大学韓国研究センター

後 援:人間文化研究機構

国文学研究資料館アーカイブズ研究系

《プログラム》

【挨拶】午後1時～1時10分

第1部

「植民地研究の展望—日本統治期朝鮮半島を中心として」

＜研究発表＞

Shin Gi Wook(スタンフォード大学)

「Colonial Modernity in Korea」

権泰億(ソウル大学校)

「植民地近代化論と日本の植民主義」

Lynn Hyung Gu(ブリティッシュコロンビア大学)

「植民地期朝鮮における政務総監の実態」

朴泰均(ソウル大学校)

「韓国の経済成長における植民地の役割」

＜特別講演＞

朴賢洙(嶺南大学校)

「韓国近代と民衆生活資料集成」

第2部

「日本統治期朝鮮半島アーカイブズ研究の展望」

＜研究発表＞

金中奎(郡山市文化観光課)

「郡山関連の歴史文化資料に関して」

車喆旭(釜山大学校)

「植民地時代釜山の南鮮倉庫株式会社関連資料について」

安藤正人(国文学研究資料館)

「旧植民地・占領地関連資料のアーカイブズ学的研究について」

加藤聖文(国文学研究資料館)

「植民地の記憶都市・福岡」

辻弘範(国文学研究資料館)

「日本所在植民地期朝鮮関連資料の調査」



日韓共同シンポジウム

日韓共同研究の展望 — 韓国の日本研究と日本の韓国研究 —

日 時: 2005年12月3日(土)

会 場: 韓国国際交流財団文化センター

主 催: 九州大学韓国研究センター

後 援: 在大韓民国日本国大使館公報文化院

協 力: 韓国国際交流財団・

国際交流基金ソウル日本文化センター

【開会辞】

柳原正治(九州大学副学長)

金恵媛(韓国国際交流財団事業理事)

榊原通紀(国際交流基金ソウル日本文化センター所長)



第1部

「韓国国際交流財団による研究支援成果報告」

司会: 松原孝俊(九州大学韓国研究センター教授)

<法律・政治分野>

発表: 石川捷治(九州大学韓国研究センター長)

評価: 朴泰均(ソウル大学校国際大学院教授)

<文化分野>

発表: 濱田耕策(九州大学人文科学研究院教授)

評価: 崔徳寿(高麗大学校文科大学韓国史学科教授)

<韓国語教育分野>

発表: 曹美庚(九州大学言語文化研究院助教授)

発表: 田口香奈子(九州大学21世紀プログラム4年生)

評価: 鄭喜貞(延世大学校言語研究文化院韓国語語学堂専任講師)

<経済分野>

発表: 深川博史(九州大学経済学研究院教授)

評価: 鄭英一(ソウル大学校社会科学大学経済学部教授)

第2部

「日韓共同研究の展望」

司会: 崔相龍(高麗大学校政経大学政治外交学科教授)

<基調講演>

洪潤植(九州大学特任教授)

<研究支援紹介>

長谷川聡(国際交流基金ソウル日本文化センター副所長)

徐雅貞(韓国国際交流財団韓国学支援部長)

<パネルディスカッション>

石川捷治(九州大学韓国研究センター長)

韓栄恵(ソウル大学校日本研究所研究部長)

李元範(東西大学校日本研究センター副所長)

朴明圭(ソウル大学校社会科学大学社会科学教授)

今回のシンポジウムでは、日韓共同研究のあり方が議論され、各分野の専門家による鋭い指摘と評価、そして近未来における日韓共同研究の緊急性・必要性が問われた。また、今後の日韓共同研究の方向性が抽出され、各分野における共同研究が九州大学韓国研究センターを媒介してより具体的かつ専門的に推進されることが期待できる。(韓国国際交流財団による研究支援について、法律・政治・文化・経済・韓国語といった各分野別に韓国研究センターの専門委員による成果報告、今後に繋がる適切な指摘と評価をいただく。)



日韓海峡圏学生サミット

私たちの提言： 日韓海峡圏共同体構築のために

日 時:2005年10月30日(日)

会 場:アクロス福岡国際会議場

共 催:九州大学韓国研究センター・
東西大学校日本研究センター

後 援：国際交流基金、日本文化交流基金、
福岡県国際交流センター

＜コーディネーター＞

小瀧徹(国際交流基金理事)

＜アドバイザー＞

張濟国(東西大学校日本研究センター所長)

石川捷治(九州大学韓国研究センター長)

【 1 】研究発表

九州大学、西南学院大学、下関市立大学、佐賀大学、長崎県立大学
東西大学校、釜山大学校、慶尚大学校、全南大学校、済州大学校

【 2 】総合討論

地域に根ざした日韓学生交流として「日韓海峡圏学生サミット」を開催

日韓海峡圏の未来を担う次世代の若者の育成やネットワークの形成

近未来の日韓関係を展開する斬新なアイディア、活発な意見交換





朴泰均（パク・テギョン）

ソウル大学校 国際大学院 教授
（九州大学韓国研究センター客員教授）

今、韓米関係史について研究しています。2005年12月から2006年3月まで九州大学で客員教授として韓米関係の資料を整理し、それを基に2006年9月、『友邦と帝国：韓米関係の2つの神話』（創批）という本を出しました。この本では主に米国国務省の資料と韓国の新聞資料を中心にして1945年から1980年までの韓米関係の主要なイシューについて実証的に分析しようとしていました。そこでは、韓日協定過程における米国の対韓政策とそれに対する朴正熙政府の対応が主要な内容の一部になっています。

これまで主に米国政府の資料と韓国の新聞に対する分析を中心に研究してきたのに対して、最近では主に韓国の資料を検討しています。現在大学院生と一緒に2005年に韓国政府の国防部和外交通商部が公開した「韓日協定関連資料」や「ベトナム戦争関連資料」、それに「金大中拉致事件関連資料」などを複写し講読しています。それを基に2007年から韓国の資料を通じて見た1960年代と1970年代の韓米日の関係について論文を書くつもりです。韓日協定関連資料については国民大学校日本学研究所で行われている資料講読に共同研究員として参加しています。

今日、韓国における韓国学は一つの転換期を迎えています。20世紀後半期の韓国学が間違っていて知られている事実や歪曲された事実をただすのに焦点があたっていたとすると、今の韓国学は20世紀的な冷戦の論理から自由で、新しい分野で韓国学を発展させる方向へと展開しています。今韓国で進んでいる「脱民族」に基

づいた新しい研究から社会史・生活史に対する研究まで、多様な分野で多様な視角で研究が行われています。

私の研究は主に前者と関連しています。韓日協定や韓国軍のベトナム戦争派兵に関するかつての研究は全て、国家主義的な観点と社会進化論的な観点からなされていました。今行われている研究は、これまで用いられなかった韓国政府の資料に対する深い分析を通じて、平和と人権を中心とした東アジア的な視角から韓国の国際関係を分析しようとするものです。

合わせて、このような新しい研究は国際的な交流を通じてもより一層促進されるものと思われます。これまで韓国学では国際的な研究交流が行われていなかったため、一国史的な観点からアプローチする場合が多かったです。しかし、これからは国際的に共有できる普遍的な歴史観に基づいた研究がなされなければならないでしょう。

そのためには、これまで九州大学韓国研究センターがリードしてきた世界韓国研究コンソーシアムが重要な役割をするものと期待しています。今は主に大学院生のワークショップを中心としてコンソーシアムが運営されていますが、今後は共同研究へと拡大するものと期待しています。それを通じて韓国学研究者がより世界史的な普遍性のある歴史観に基づいて歴史研究を行うことができる一つの基礎になるだけでなく、次世代研究者にとっても新しい歴史認識を共有できる契機になるものと期待しています。



カリフォルニア大学 バークレー校における 浅見倫太郎 コレクションの調査

松原 孝俊

九州大学韓国研究センター



幸いにも文部省(当時)在外研究員に選ばれて、アメリカのカリフォルニア大学バークレー校で研修することになった。5年待ち続けた甲斐があった。カリフォルニアに向かったのは、1999年10月であった。韓国研究の専門家であるだけに、周囲の方々から当然に在外研修国は韓国であると信じられていた。その期待に反して、私はアメリカを選んだ。その理由は、二つであった。その一つは、アメリカの韓国研究(地域研究も含めて)の現状を肌で感じたかったからである。もう一つは、バークレー校に所蔵されるAsami Collection(浅見コレクション)の朝鮮本約4000冊を閲覧したかったからである。

美しいキャンパスと大学図書館の膨大な蔵書(約900万冊)に驚かされたバークレー校では、亡き勝村勝也教授(京都大学)のお導きで、仏教学の大家Lewis Lancaster教授が待っていてくださった。お目にかかった当日、大学のファカルティクラブで昼食を共にしたが、Lancaster教授は二人の友人を紹介してくださった。その内のお一人は、ノーベル賞受賞者であった。

Lancaster教授が私に提供してくださった研究室は、東アジア図書館2階入口右側の部屋であった。私はその僥倖を喜んだ。浅見倫太郎コレクション(東アジア図書館地下貴重書庫内に架蔵)は我が足下にあった。

土日と休日を省いて、10ヶ月の間、私は浅見文庫に日参した。

午前8時45分入館、午後4時退館。単調な生活リズムであったが、まったく飽くことはなかった。浅見コレクション目録第1番から全典籍読破が狙いであったので、

‘The Asami library; a descriptive catalogue, by Chaoying Fang. Edited by Elizabeth Huff.’ (University of California Press, 1969.424p)

は、必読書であった。しかしながら、すぐにこのカタログの書誌学的説明に不満を覚えた。労作であると分かっても、Fangのカタログには朝鮮本に対する理解が不足していた。特にハングルで記された典籍の説明は物足りなかった。数週間経過してからであったが、その疑念を払拭してくださったのは、浅見コレクション出納担当スタッフのKobayashi Tomoko氏(Supervisor, Public Services)である。Fang氏は中国人であるという。私の疑念は氷解した。

その時点から、私のバークレー滞在計画が狂った。気楽に好きな朝鮮本を閲覧するはずであったにもかかわらず、1点1点ずつ書

誌的メモをノートに記入せざるをえなかったからである。滞在期間は10ヶ月を切っている。貴重本であるだけに、帯出も出来ない。松原版「浅見コレクションメモ」を作りたいと願ったものの、1馬力では全点調査は不可能に近い。その当時、韓国セクションのライブラリアンは不在であったので、日本セクションのライブラリアン石松久幸氏の全面的協力で、閲覧に支障はなかった。赤い表紙の貴重書出納ノートには、毎日「Takatoshi Matsubara」と浅見コレクション所蔵番号で埋め尽くされた(そのコピーは私の幸せな思い出の品である)。しかし私の調査は終わりそうになかった。大学ノートは6冊目に達した。私の原則は全点、全ページに目を通すことであったので、時間はいくらあっても足らなかった。その内に、目に飛び込んできたのは、浅見自身のメモ書きであった。稀代の愛書家浅見の観察は的確で、しかも貴重な情報に富んでいた。その浅見メモの一例を、『孝行大義』(浅見コレクション10-7)に見てみよう。

「考経一冊、忠経一冊 / 朝鮮英祖時木板 / 大正三年九月廿八日京城ニテ朴春和ヨリ四円ニテ買ウ / 印刷用紙共二極テ善本ナリ / 考経ハ朱子ノ刊誤本二董鼎注ノモノ柳成龍ノ跋後アリ / 忠経ハ明ノ宣徳板ノ本ツキ王相ノ箋注アルモノナリ / 本書考経ノ巻首ニ貞宗大王御筆又ハ永祐園書筆トアルモノ二者同一人ニアラズ永祐園トアルヲ正トス貞宗ナラバ延祐宮永陵タラザハナラズ又十歳ニシテ致シ其干支ハ壬戌■(判読不可) シ永祐園ハ莊献世子ノ園号ニシテ共配洪氏ハ洪鳳漢ノ女世ノ恐惶ナル間ニ雜録ヲ伝フ本書書筆ノ壬戌十月初七日トアルハ英祖十八年壬戌タリシ莊献世子八歳ノ時ノ筆蹟タルコト疑ナカルベシ当時洪家ノ書ト思ハルルモノヲ多ク買得タルノモ一証ナリ / 大正五年七月卅日皆僞明治天皇祭日之 倫識」「壬戌ハ莊献世子筆」(高等法院の野紙)

こうした貴重な書誌情報を盛り込んだ浅見メモの存在こそ、コレクションの価値は高い。ほぼ全点に及んでいたはずであるが、そのメモは多く残されていない。浅見が居住した京城(現在、ソウル)から三井物産へ売り渡されて東京へ運ばれ、また戦後の1950年に東京からバークレーへと輸送される間に紛失したかもしれない。またバークレーで閲覧申請されるたびに心なき者の不注意で、多数のメモが典籍からこぼれ落ちたに違いない。

さて、日本統治期朝鮮半島の京城(今のソウル)には、綺羅星のごとき愛書家で、蔵書家の一群がいた。前間恭作・鮎貝房之進・浅見倫太郎・河合弘民・藤田亮策・三木榮・奥平武彦・田川孝

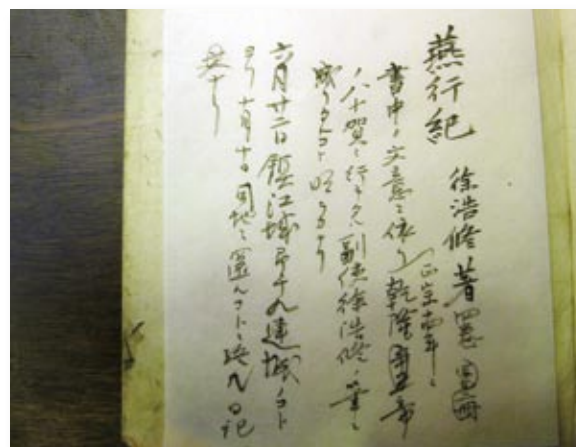
三・高橋亨・黒田幹一・末松保和・今西龍・藤塚鄰・稲葉君山などの日本人に加えて、李仁榮・宋錫夏・崔南善らの韓国人である。かれら日本人蔵書家たちの朝鮮本の運命は、1945年の日本敗戦を起点として3分類できる。日本への引き揚げの混乱で散逸したコレクション(藤田亮策・鮎貝房之進・田川孝三・末松保和・奥平武彦・高橋亨)がその一つ、日本所蔵コレクション(前間恭策—東洋文庫、河合弘民—京都大学、三木榮—武田文庫、今西龍—天理大学、黒田幹一—個人所蔵、藤塚鄰—個人所蔵)がその二、中国所蔵コレクション(稲葉君山—一部が吉林大学)、そしてアメリカに浅見コレクションがその三である。

遠からぬうちに、我が浅見コレクション書誌学的メモを公開したいと思うが、浅見倫太郎自身の写真も残されていないばかりか、ご子孫の転居先も不明であり、いくつかの謎が解けないままである。なぜ、浅見コレクションが三井文庫に売却されたのか。なぜ、三井文庫に売却された典籍数とパークレー所蔵典籍数とが異なるのか、などなど。

これらの謎は、我々が取り組む「パンドラの箱」であろうが、韓国研究の学徒の一人として気になるのは、浅見倫太郎が構想した韓国学とは何であったかということである。発見が多すぎて、もうしばらく、浅見コレクションに没頭するために、パークレー通いが続きそうである。

なお、忘れるところであったが、九州大学韓国研究センターとし

て日本最初の韓国研究機関が開設されたことで、我が在外研究の第1番目の目的は達せられたと付言しておきたい。男子の本懐これに過ぐるものはない。



浅見倫太郎 年譜

明治元年(1868)12月10日	生まれる。 本籍地:山形県米沢市新町二之町
明治25年(1892)7月	東京帝国大学法科大学卒業。
明治25年(1892)8月	司法官試補に任じられる。 検事となり、東京市麹町区裁判所奉職。 判事に任じ横浜地方裁判所部長、 東控訴院判事、 宮城控訴院検事、 東京地方裁判所検事 等 歴任。
明治39年(1906)6月	統監府法務院評定官(兼・民事課長)として渡鮮。民事慣習調査に従事
明治43年(1910)	日韓併合。 朝鮮総督府判事、 高等法院判事 等歴任。
大正5年(1916)4月1日	『朝鮮蒐書目録』を作成
大正6年(1917)頃	当時の住所は 京城市仁義洞 28 電話 1660 番
大正7年(1918)2月	浅見蒐集の朝鮮本を東京の三井文庫へ寄贈することになり、『朝鮮蒐書目録』巻末に「朝鮮書目跋」を記入。
大正7年(1918)3月6日	京城から帰国の途へ。
大正9年(1920)12月	朝鮮本を京城三井物産から、東京三井合名会社に送付。(23箱総計 1084部 5771冊)
大正10年(1921)	東京帝国大学から法学博士号を授与される。博士論文名「半島法制ノ沿革」。
昭和17年(1943)	逝去
家庭には 夫人 やゑ(明治7(1874)年4月生)	
長男 弘毅(明治32(1899)年2月生)	長女 富子(明治35(1902)年8月生)
二女 周子(明治37(1904)年10月生)	三女 栄子(明治38(1905)年10月生)
四女 実子(明治44(1911)年2月生)	二男 弘実(明治45(1912)年3月生)

《参考資料》

「浅見博士蒐集の朝鮮本」『書物同好会報』第6号、7頁、昭和14年12月、7p。

芳賀登〔ほか〕編『日本人物大系72 朝鮮公論社編「在朝鮮内地人 紳士名鑑」』皓星社、2001年7月、496p。

中見立夫「稲葉岩吉の旧蔵書を追って」松原孝俊編『台湾・朝鮮・満洲に設立された日本植民地期各種図書館所蔵日本古典籍の書誌的研究』科研中間報告書、平成13年3月、pp.23～36。



Don Baker

Professor; Director of Centre for Korean Research, University of British Columbia

Korean Studies at UBC

The University of British Columbia does not have the oldest Korean Studies program in Canada (that honor goes to the University of Toronto) but at the present time it has the largest. We can date the beginning of Korean Studies at UBC to the hiring of Don Baker in 1987 as the Korea-Canada Business Council chair of Korean Civilization to begin the teaching of Korean language and history in the Department of Asian Studies. Enrollment in Korean Studies classes grew quickly and by 1993 the Department of Asian Studies had added another professor of Korean language, the linguist Ross King, as well as an instructor, Insun Lee. At the same time, the UBC Institute of Asian Research created a Centre for Korean Research to promote research on Korea across the entire campus. That centre now has two full-time research professors, Kyung-Ae Park (a political scientist) and Hyung Gu Lynn (a historian of modern Korea).

Further strengthening the Korean Studies program at UBC, the Department of Asian Studies recently hired Bruce Fulton to teach Korean literature and literary translation (thanks to a generous donation from the International Communication Foundation). Moreover, Namlin Hur, though originally a specialist in Japanese religion, has begun teaching courses in the Department of Asian Studies on the history of relations between Japan and Korea. In addition, the Faculty of Law has hired Tae-Ung Baek to teach Korean law, the School of Music has hired Nathan Hesselink to teach Korean folk music, and the Department of Sociology has hired Jennifer Chun to teach about Korean society. On top of that, there are two professors at UBC who teach courses on Korea and engage in research on Korea, though Korea is not their primary specialty. Steven Lee, an expert on Canadian diplomatic history, teaches the history of 20th century Korea, and Millie Creighton, an anthropologist of Japan, teaches a course on Korean culture.

In addition to those 12 faculty members who teach classes focusing on Korea, there are also other professors at UBC who, though they don't teach classes on Korea per se, have published research dealing with Korea. For example, the Liu

Institute for Global Issues has four political scientists who do research on Korea. They are Paul Evans, Brian Job, Wade Huntley and Andrew Mack. Also Yunshik Chang, who retired from teaching in the UBC Sociology Department a few years ago, continues to publish research on contemporary Korean society.

In terms of faculty members, the UBC Korean Studies program is now the third largest in North America, behind only the University of Hawaii and UCLA. As a result, UBC has a growing number of graduate students focusing on Korea, ranging from students in political science and geography to students specializing in Korean history, religion, philosophy, and language. UBC is committed to further developing Korean Studies and Korean Research on our campus, particularly through the training of graduate students. It is our belief that one way to enhance both the training of graduate students and the quality of faculty research at UBC in Korean Studies is to cooperate with other Korean Studies centers around the world through the Global Network of Korean Studies Centers.



九州大学における韓国学教育

	科 目	担 当
全学教育	韓国語フォーラム	金貞淑
	韓国語	李 一・李希ジョン・曹美庚
	朝鮮半島の言語と文化	松原孝俊
	韓国理解講座	松原孝俊
文学部	朝鮮歴史文化論演習	長節子
	朝鮮史学講義	森平雅彦
	朝鮮歴史文化論講義	桑野栄治
	朝鮮史学講読	森平雅彦
	朝鮮史学演習	森平雅彦
	朝鮮史学講義	森平雅彦
	朝鮮史学演習	濱田耕策
	朝鮮史学講義	濱田耕策
人文科学府	朝鮮古代史史料研究	濱田耕策
	日朝関係史研究	長節子
	朝鮮中世近世史研究	森平雅彦
	朝鮮古代史研究	濱田耕策
	朝鮮思想史研究	桑野栄治
	朝鮮中世近世史特論	森平雅彦
教育学部	日本植民地教育史	稲葉継雄
	アジアの教育	稲葉継雄
人間環境学府	アジア教育交流史	稲葉継雄
	比較教育文化論	稲葉継雄
	比較教育文化論講究	稲葉継雄
法学部	韓国法	崔鍾植
	韓国法演習	崔鍾植
	外国政治書講読(韓国語)	崔鍾植・李弘杓・出水薫
経済学部	外国書講読(韓国語経済)	深川博史・吉岡英美
比較社会文化学府	アジア言語文化論	松原孝俊
	世界言語と文化	曹美庚

国内外のメディアが注目

国際ワークショップ

韓国の有力紙『東亜日報』が報道 7月1日
「特派員ワールド・ウォッチ」

日韓海峡圏学生サミット

『西日本新聞』 10月27日
「日韓スクラム 理想の交流 学生が提言」

植民地朝鮮における日本人の生活誌研究

『朝日新聞』 12月19日
「生活者の見た植民地」

韓国研究センターの研究活動一覧

2005年5月～2006年2月

年	月	日	視察、会議、催し等
2005	5	28	第1回定例研究会
	6	27	第1回韓国学国際ワークショップ(7/4まで) 環太平洋韓国研究コンソーシアム主催 テーマ:「韓国のナショナリズム」
	7	9	第2回定例研究会
	9	24	第3回定例研究会
	10	17	県民セミナー 福岡県国際交流センターとの共催 相良寿晃「お茶の縁・日韓の心の交わり」 松原孝俊「日韓ティーロード」
		24	県民セミナー 福岡県国際交流センターとの共催 田中治雄「お菓子と和」 蔡水晶「日韓のお茶とパンソリ」
		29	第4回定例研究会
		30	国際シンポジウム「松雲大師と玄界灘」
		30	日韓海峡圏学生サミット
		30	「私たちの提言:日韓海峡圏共同体構築のために」 東西大学校日本研究センターとの共催
	11	4	次世代高句麗研究者ワークショップ
		5	国際シンポジウム「日本と高句麗 人とサラムの交流」 朝日新聞西部本社・韓国国際交流財団・九州国立博物館・高句麗研究財団との共催 公開講演 研究報告 第1部「高句麗史をどのように理解するか」 第2部「高句麗の文化をどう理解するか」 第3部「高句麗史と古代韓国と日本」 シンポジウム

年	月	日	視察、会議、催し等
2005	11	21	県民シンポジウム「茶道で学ぶ日韓和の心」 福岡県国際交流センターとの共催 基調講演:千玄室(裏千家大宗匠)先生が語る「和の心」 総合討論:仁東権(韓国中央大学校名誉教授) 熊倉功夫(国立民族学博物館名誉教授・林原美術館長)
		22	第5回定例研究会
	12	3	日韓共同シンポジウム 「日韓共同研究の展望:韓国の日本研究と日本の韓国研究」 第1部「韓国国際交流財団による研究支援成果報告」 第2部「日韓共同研究の展望」
		13	第6回定例研究会
		18	国際シンポジウム「植民地研究の展望」
2006	1	25	第7回定例研究会
		11	歴史批評との共同研究会
	2	11	第2回センター長会議 環太平洋韓国研究コンソーシアムの再編・拡大 12大学から構成される世界韓国研究コンソーシアムへ
		17	第8回定例研究会

Information

ご投稿ください!

ニュースレターでは、できるかぎり幅広い広報を行うため、さまざまなコーナーを設け、皆様のご投稿をお待ちしています。

研究紹介

韓国・日韓関係にまつわる領域研究のもとでえられた具体的な研究成果を紹介しします。また、韓国研究センターが支援する各種事業の成果の報告、諸分野の研究手法や研究の背景、内外で発表された優れた研究を紹介するコーナーです。

インタビュー

座談会やインタビューで、研究者の素顔をご紹介しますと思います。

研究ノート

“科学者のひとりごと” “研究に関して日頃思っていること” “韓国との出会い” 等々お寄せください。

その他

関連する学会・研究会・シンポジウムの案内、近著紹介、等につきましても掲載いたしますので、随時お知らせください。

センター利用案内

開館時間 / 10:00～17:00

九州大学韓国研究センターでは下記のホームページ URL で事業紹介を行っています。

<http://rcks.isc.kyushu-u.ac.jp/>



■最寄りの交通機関

- JR博多駅→地下鉄中州川端乗換(貝塚行)→箱崎九大前又は貝塚下車
- 福岡空港→地下鉄中州川端乗換(貝塚行)→箱崎九大前又は貝塚下車



バスのりば

- 天神14番のりば No.1, 59, 61, 161の「九大前」行き、「月見町」行き→九大前下車
- 天神郵便局前のりば No.21～27→九大北門下車

九州大学韓国研究センター News Letter Vol.6

編集発行 九州大学韓国研究センター 2006年3月15日

問い合わせ先

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1 TEL:092-642-4358 FAX:092-642-4359 E-mail:rcks.uok@mbox.kyushu-u.ac.jp <http://rcks.isc.kyushu-u.ac.jp/>